Annual Report 2025

ジェンダー・ダイバーシティ研究所年報

第２号

和洋女子大学

INDEX

第２号発刊にあたって…… 2

ジェンダー・ダイバーシティ研究所の事業計画…… 4

ジェンダー・ダイバーシティ研究所スタッフ…… 6

さざなみについて…… 7

Short Article 1
世界秩序とジェンダー問題…… 8

Short Article 2
「美しい物語」は終焉するのか …… 10

Short Article 3
『ババヤガの夜』に描かれたこと …… 12

2025年度ジェンダー・ダイバーシティ研究所活動報告…… 15

2025年度研究員・特別研究員の
ジェンダー・ダイバーシティに関する活動・業績…… 31

2025年度ジェンダーをめぐる社会の動きをふり返って…… 35

編集後記…… 巻末

第２号発刊にあたって

ジェンダー・ダイバーシティ研究所　代表　**田口 久美子**

世界経済フォーラムによるジェンダーギャップランキング2025で日本は148か国中118位とあいかわらず低迷し、ジェンダー格差が大きい状況が続いています。日本のジェンダーギャップはG7の中でも最下位であり、ジェンダー平等では後進国といえます。日本のジェンダーギャップでの劣勢と、経済や科学技術の日本の優位な立場との大きな乖離もまた日本の大きな特徴です。

経済や科学技術、あるいはそれらを推進する子どもたちの学力が世界のトップクラスになることには懸命に取り組み、お金をかける一方、ジェンダー格差の解消には消極的、という日本の姿が浮かび上がります。

ジェンダーギャップランキング118位という結果の指標は、政治や経済におけるリーダー的な立場における女性の少なさを反映するものですが、人々の生活においては、家庭内暴力（DV）の多さ、女性の非正規雇用の多さ、女性が一人で家事育児を担ういわゆるワンオペなどに波及しています。一部の支配層の人たち（多くは男性）がトップに立つ社会では、女性は社会への参画はいうに及ばず、日々の生活においても悩み、葛藤し、不全感を感じていることが察せられるのです。

国会議員の女性の数はほんの少しずつではありますが上昇し、2025年秋には初めての女性首相も誕生しました。しかしながら、夫婦同姓制度のまま旧姓での通称使用を制度化するという高市首相が打ち出している政策は、多くの女性たちが切望してきた選択的夫婦別姓制度とはまったく別のものです。婚姻を契機に自分自身のアイデンティティの基盤となってきた自己の名前の変更を余儀なくされるという無念さを抱き続け、夫婦別姓への変更に声を上げてきた女性たちの気持ちを新たな法律に反映しようとする意図はみられません。このほか、憲法改正や外国人に関する強硬な政策を打ち出していること等が懸念されます。

高市さんが日本の憲政史上初めて女性の首相になったこと自体は、ジェンダーにかかわらず人々が能力を発揮しうる社会の推進という文脈において喜ばしいことです。特筆すべきは、高市さんが首相になったことで、多くの女性たちの切なる声を政治や経済、人々の暮らしに届けるためには、少数の女性がマジョリティの男性に交じってリーダーになるだけでは不十分で、多くの女性が政策等の意思決定に参加することが明白になったということではないでしょうか。高市さんが日本で初めて女性首相になったことの意義は、より多くの女性の社会参画が必要であることを社会に示したということであるといえるでしょう。

わたしたちジェンダー・ダイバーシティ研究所では、今後も女性をはじめとしてすべての人々が不平等や格差、偏見や排除から解放され、共生して豊かな社会をつくるためにはどうすればいいか、研究を続け、研究成果を発信し、教育や人々の生活に還元していきます。

さて、和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所の設立から2年目となる今年度も、『ジェンダー・ダイバーシティ研究所年報』第2号をお届けできることをうれしく思います。2025年度は、企業とコラボし学生も巻き込んだ月経衛生デーの取り組みや、学生、教職員、地域の方々をお招きしての映画観賞会など、新たな取り組みを行いました。今後とも引き続き、みなさまからのご指導・ご鞭撻を心よりお待ち申し上げます。

ジェンダー・ダイバーシティ研究所の事業計画

ジェンダー・ダイバーシティ研究所　代表　**田口 久美子**

設立趣旨（目的）

和洋女子大学は創立以来、建学の精神に基づき、合理的・科学的に思考し、行動し、男子と対等に意見の言える教養を身につけ、社会に目を向け自立する女性を育ててきました。

ジェンダー・ダイバーシティ研究所は、和洋学園及び和洋女子大学のこれまでの歩みを基軸としながら、125周年の記念事業の一つとして設立しました。女子大学の使命ともいえるジェンダー格差の解消ならびに、障害をはじめとして多様な背景を持つ人々が抱える困難の解消を目指し、すべての人々が安心して社会参加や生活ができる共生社会の構築に向けて、研究を行います。

以下に掲げる活動内容を事業として計画しています。

活動内容

1　社会におけるジェンダー、ダイバーシティに関わる基礎的・実践的研究

（1）和洋コース*学生の追跡調査（縦断調査）

（2）入学時のオリエンテーションプログラムの開発

（3）フィールドワーク研究

（4）文献研究

2　本研究所と目的、趣旨を同じくする教育機関、および地域における機関との連携

（1）人々の更生や生活支援を担う地域の機関との連携

（2）非行防止・犯罪に巻き込まれないための活動

（3）特別支援学校との連携

3　研究会、講演会、研修会、シンポジウム、ワークショップなどの開催

（1）女子大学連携ネットワークの運営

（2）メディアを通じて人権の尊さを訴える活動

（3）研究会の開催

（4）シンポジウムの開催

（5）出前講座の開催

4　研究と活動の成果物の出版および公開

（1）報告書（研究紀要）の定期刊行

（2）著書・論文の刊行

5　その他研究員が必要と認めた事業

＊2020年にスタートした高大接続７年制和洋教育プログラムを指します。和洋国府台女子中学校高等学校の和洋コース（高校）生が、和洋女子大学と接続した７年間の女子教育プログラムを受けたことによる教育効果を考察します。

以上

ジェンダー・ダイバーシティ研究所
スタッフ

岸田宏司（家政学部教授、総合研究機構代表、ジェンダー・ダイバーシティ研究所研究員）

関西大学大学院社会学研究科〔昭和57年〕博士前期課程（心理学）修了。専門は老年学、老人福祉学、社会保障論。日本能率協会総合研究所、ニッセイ基礎研究所を経て、和洋女子大学家政学部教授、総合研究機構代表で、前和洋女子大学学長。共著に『日本の家族はどう変わったのか』（NHK出版 1996年）、『生活文化を学ぶ人のために』（世界思想社 1997年）、『行政サービスビジネス』（東洋経済 1997年）、『定年前・定年後（朝日新聞社 2007年）。

田口久美子（ジェンダー・ダイバーシティ研究所代表、特別研究員）

お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程（教育学専攻）修了。専門は発達心理学、教育心理学、ジェンダー論。愛知県立大学助教授、長崎外国語大学教授、和洋女子大学教授を経て、現在和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所代表。共著に『女性の生きづらさとジェンダー―片隅の言葉と向き合う心理学』（有斐閣：2021）、『女性校長はなぜ増えないのか-管理職養成システム改革の課題』（勁草書房：2017）。

奈良玲子（全学教育センター准教授、ジェンダー・ダイバーシティ研究所研究員）

国立テヘラン大学社会学部社会学科後期修了。博士（社会学）。専門は地域研究（イラン）、ジェンダーと教育、特別支援教育。主な業績に“The Contemporary Landscape of Women's Higher Education Attainment and Social Status in Shii Iran”『日本国際情報研究』20号（2023）、「日本版WISCの全体像とWISC-Vの改訂ポイント―先行研究に基づくレビュー研究：5つの主要指標を中心に―」『和洋女子大学教職教育支援センター年報』第13号（2026）等。

野澤和世（企画部長、ジェンダー・ダイバーシティ研究所研究員）

早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程修了。前職は和洋女子大学学生支援部進路支援センター事務局室長。千葉県大学就職指導会副会長。大学職業指導研究会にて役員としてダイバーシティをテーマに研究。グローバル人材のキャリア教育に携わる。共著に「外国人留学生のための日本就職オールガイド」（凡人社）。

福原　充（全学教育センター助手、ジェンダー・ダイバーシティ研究所研究員）

立教大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程前期課程修了（教育学）。専門は日本近代教育史、シティズンシップ教育、初年次教育。目黒区児童館指導員、立教大学立教サービスラーニング（RSL）センター教育研究コーディネーターを経て、現在和洋女子大学全学教育センター助手、立教大学兼任講師、立教大学キリスト教教育研究所（JICE）研究員。共著に『女性のためのキャリアデザイン―学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて―』（ムイスリ出版：2025）。

さざなみについて

さざ波とは、細かに立つ波、さざれなみ、あるいは 心の小さな動揺、小さな争い、不和という意味があります。ジェンダーをはじめとする、マイノリティに置かれている人々は、生きづらさに加え、その声をあげられないという二重の苦しみを抱えていることが多く見られます。そうした人々の言葉が社会に投げかけられ、さざ波のようにその声が広がり、社会の変革につながるように、との意を込めて、このコーナーを設けました。

このコーナーでは、ジェンダー、障害、エスニシティ、貧困、不登校など、多様な背景による生きづらさにかかわる実態や活動にかんするShort Article、資料報告、研究ノート、研究論文など幅広いジャンルの自由な形式による論考を掲載します。

第２号では、Short Article ３編を掲載します。

Short Article1

世界秩序とジェンダー問題

近年、国際社会では中東情勢をはじめとする軍事的緊張が高まり、既存の世界秩序の不安定化が指摘されている。こうした状況は通常、国家間の安全保障や地政学的利害の観点から説明されることが多い。しかし、国際政治をより多角的に理解するためには、軍事や外交の枠組みにとどまらず、社会構造やジェンダー関係の視点から検討することも重要ではないだろうか。とりわけ、国家権力が女性の身体や生活にどのように関与しているのかという問題は、世界秩序を構成する権力関係を読み解く上でも重要な視角を提供する。

本稿では、2月28日のアメリカとイスラエルの攻撃を機に緊張が高まるイラン情勢を手がかりとして、国際政治と女性の身体をめぐる統治の関係について考察し、世界秩序をジェンダーの観点から捉え直す試みを行う。

近代の国際政治は長らく男性中心の政治文化のなかで形成されてきた。外交、安全保障、軍事戦略といった意思決定の場は依然として男性主体によって構成されることが多く、国家安全保障の議論は軍事力や抑止力といった価値を中心に展開される傾向が強い。その結果として、戦争や軍事的緊張が社会生活に及ぼす影響、とりわけ生活基盤やケア労働に関わる問題は周縁化されやすい。戦争は国家の問題として語られる一方で、実際には家庭や地域社会といった生活世界に深く入り込み、人々の日常生活を大きく変化させる。このように、世界秩序の問題は国家間の政治的関係だけでなく、社会内部のジェンダー構造とも密接に結びついていると考えられるのではないだろうか。

イラン情勢をめぐる問題を理解するうえで重要なのは、同国における女性の身体をめぐる政治である。1979年のイスラーム革命以降、イランでは女性の服装規制、とりわけヒジャブの着用が国家によって制度化されてきた。女性の身体は単なる個人のものではなく、宗教的価値や国家秩序を象徴するものとして政治的に位置づけられてきたのである。ヒジャブの着用は宗教的規範として説明されることが多いが、同時にそれは国家が女性の身体を管理し規範化する制度でもある。このように国家権力が身体を対象として社会秩序を形成しようとする過程は、フェミニズム研究において「身体統治（body politics）」として議論されてきた。

この問題は、ミシェル・フーコーが提示した統治性（governmentality）の概念[1)]とも関連づけて理解することができる。フーコーは、近代社会における権力が単に法や強制によって行使されるのではなく、人々の身体や行動、生活様式を規範化することを通じて作用することを指摘した。女性の服装や身体をめぐる規制は、こうした統治のメカニズムが日常生活のレベルで作用している例といえる。すなわち、女性の身体は国家権力が社会秩序を維持するための象徴的な領域として位置づけられているのである。

このような身体統治の問題は、近年の女性運動によって国際的な注目を集めた。2022年には、ヒジャブの着用が適切ではないという理由で拘束されたイラン人女性マフサ・アミニの死亡事件[2)]を契機として、大規模な抗議運動がイラン国内外で広がったことからも把握できる。この運動では「女性・生命・自由（Woman, Life, Freedom）」というスローガンが掲げられ、女性の身体を国家が統治する構造に対する批判が強く表明された。ヒジャブを外す行為そのものが政治的抗議として位置づけられ、女性の身体をめぐる規範が政治的争点として国際社会の注目を集めることとなったのである。すなわち、女性の身体は国家統治の対象であると同時に、政治的抵抗の場ともなりうるのである。

一方で、軍事的緊張の高まりは国家主義的言説を強め、市民社会の活動空間を縮小させる契機ともなり得る。国家の安全保障が強調される状況では社会統制が強化され、女性の権利運動や市民的自由が制約される可能性がある。これは、国際政治の動向と国内のジェンダー政治が相互に影響し合っていることを示している。すなわち、世界秩序の変動は国家間の軍事関係だけでなく、社会内部の権力構造やジェンダー秩序にも影響を及ぼすのである。

以上のように、イラン情勢は、軍事的対立という安全保障上の問題と、女性の身体をめぐる統治の問題が密接に結びついていることを示している。女性の身体は国家の統治や文化的秩序を象徴する場として政治化される一方、その規範に対する抵抗は社会変革の契機にもなり得る。こうした点は、世界秩序が国家間の軍事的均衡だけでなく、社会規範や身体統治のあり方とも関わりながら形成されていることを示唆している。したがって、世界秩序をジェンダーの視点から捉えることは、国際政治をより多層的に理解するための重要な視点を提供するといえる。

奇しくもこの原稿を仕上げている2026年3月10日、イランではアメリカとイスラエルの攻撃により死亡した最高指導者ハメネイ師の後継者として、次男のモジタバ師が第3代指導者に選出された[3)]。モジタバ師は反米強硬派として知られており、当然のことながら女性の服装規制を含むイスラーム的社会秩序の維持にも強い姿勢を示すとみられている。

軍事的緊張が高まり国家安全保障が強調される状況では、社会統制が強化され、女性の身体や生活規範をめぐる規制が再び政治的に強調される可能性も否定できない。すなわち、国際政治の緊張と国内のジェンダー秩序は無関係に存在するのではなく、相互に影響し合いながら再編されていくのである。

現在のイラン情勢は単なる地域紛争としてではなく、国家権力が女性の身体をいかに統治の対象とし、またそれに対する抵抗がどのように社会変化を生み出しうるのかという点からも注視されるべき局面にあるといえる。今後の国際情勢の展開を視野に入れながら、この問題がジェンダー秩序にどのような影響を及ぼしていくのかについて引き続き関心を向けていく必要がある。

脚注）

1）ミシェル・フーコー（2020）『監獄の誕生（新装版）―監視と処罰―』田村俶訳　新潮社

2）「「私だったかも」 髪の隠し方を責められた22歳の死　怒る女性たち」朝日新聞デジタル　2022年9月23日
https://www.asahi.com/articles/ASQ9R4RTFQ9QUHBI047.html?msockid=2828729fd9e36e1b005d605bd8ce6f53
2026年3月10日閲覧

3）「ハメネイ師後継に次男」『毎日新聞』2026年3月10日朝刊1面

（文責：奈良玲子）

Short Article2

「美しい物語」は終焉するのか

2026年1月20日、スイスで開かれた世界経済フォーラム年次総会（ダボス会議）において、カナダのマーク・カーニー首相が演説のなかで「ルールに基づく国際秩序」という戦後80年の「美しい物語」は終わったと指摘し、「ミドルパワー（中堅国家）の結束」を呼びかけたことが大きな反響を呼んだ[(1)]。

カーニー首相は、これまでの「ルールに基づく国際秩序」の虚構と限界について以下のように語ったとされる[(2)]。

> 私たちは、この「ルールに基づく国際秩序」の物語が部分的に虚構であることを知っていました。強大な国は都合の良いときに自らをルールの適用外にするということを。貿易ルールが非対称的に執行されるということを。そして国際法がどれほど厳格に適用されるかは、被告や被害者が誰であるかによって異なるということを。
>
> この虚構は便利なもので、特にアメリカの覇権は公共財の創出につながりました。開かれた海上航路、安定した金融システム、集団的安全保障、紛争解決の枠組みへの支援などです。
>
> だから、私たちは看板を掲げました。儀式に参加しました。
>
> そして、言葉と現実の間の隔たりを指摘することをほとんど避けてきました。しかし、このような取引はいまや機能しなくなっています。
>
> 率直に申し上げます。私たちは移行期ではなく、断絶の真っただ中にいます。

国連憲章や人権の尊重、民主主義のゆらぎや危機について、2020年代に入り、これまで以上に報じられるようになった印象を持つ。スウェーデンの調査機関の報告書によれば、民主主義国家に居住する世界人口の割合は、2004年の51％に対し、2024年は28％にまで減少したことが明らかになっている[(3)]。

日本も、そして大学も例外ではない。第二次トランプ政権の下、ハーバード大学などに対する助成金の見直し、留学生の入国制限、DEIに対する動きなどの影響もあってか、日本国内においてもコミュニティを分断させるような議論や動きが活発化しているように感じる状況が多発している。

2024年7月には東京大学安田講堂で「民主主義と東京大学」と銘うったイベントが開催され、その内容をまとめた書籍が刊行された[(4)]。

少し、過去を振り返ってみたい。日本は、2025年に戦後80年を迎えたが、敗戦国であった当時は「ゼロ地点」と評されるような状況にあったという。戦後復興とともに、新しい国・新しい社会づくりが目指され、日本は国民主権、民主主義の国家となった。これにともなって教育政策でも動きがあった。新しい憲法である日本国憲法を広く普及させていくため、1947年に中学一年生の社会科教科書（小冊子）として文部省（当時）より『あたらしい憲法のはなし』が発行された。同教科書のなかで記された「国際平和主義」の箇所（一部）を確認してみたい[(5)]。

> じぶんの国のことばかりを考え、じぶんの国のためばかりを考えて、ほかの国の立場を考えないでは、世界中の国が、なかよくしてゆくことはできません。世界中の国が、いくさをしないで、なかよくやってゆくことを、国際平和主義といいます。だから民主主義ということは、この国際平和主義と、たいへんふかい関係があるのです。こんどの憲法で、民主主義のやりかたをきめたからには、またほかの国にたいしても、国際平和主義でやってゆくということになるのは、あたりまえであります。この国際平和主義をわすれて、じぶんの国のことばかり考えていたので、とうとう戦争をはじめてしまったのです。そこであたらしい憲法では、前文の中に、これからは、国際平和主義でやってゆくということを、力強いことばで書いてあります。

現代の社会状況からみれば、ここで書かれた言葉が果たされる社会、世界になっているとはとてもいいがたい状況にあるといえるだろう。

カーニー首相の演説の内容に戻ろう。カーニー首相は断絶の真っただ中にあったとしても、「基本的価値、すなわち主権と領土の一体性、国連憲章にのっとった場合を除く武力行使の禁止、人権の尊重に対するコミットメントにおいて原則を貫くこと」、「旧い秩序の復活を待つのではなく、言葉どおりに機能する制度や合意を創出するべき」だと主張している[(6)]。

「美しい物語」は待っていても実現されるものではない。待ったままでは「終焉」となる。掲げた理念、言葉を実現するために小さなことからでも私たち自身ができることを見出し、取り組んでいくこと。自分たちで「美しい物語」をそれぞれに実現させていく道を地道に創出していかなければならないということを改めて強く感じている。

《注》

(1)「ルールに基づく国際秩序」は終わった…中堅国家に残された道は　カナダ・カーニー首相のダボス会議演説全文」東京新聞デジタル、2026年3月6日23時37分配信、2026年3月12日最終閲覧、https://www.tokyo-np.co.jp/article/473129

(2) 同上

(3)『DEMOCRACY REPORT 2025』（PDF）、7頁、2026年3月12日最終閲覧、https://www.v-dem.net/documents/61/v-dem-dr__2025_lowres_v2.pdf

(4)『民主主義と東京大学 大学の自由と使命を考える』宇野重規編、一般社団法人東京大学出版会、2025年

(5)『あたらしい憲法のはなし』文部省、1947年、10-12頁（復刻版：『文部省著作　社会科教科書』［全15冊］監修・解説山住正己、日本図書センター、1981年）

(6) 前掲注（1）

（文責：福原　充）

Short Article3

『ババヤガの夜』に描かれたこと

王谷晶さんの『ババヤガの夜』が2025年ダガー賞を受賞したというニュースを報道で知った。この作品は、The Night of Baba Yagaというタイトルで翻訳され、英国推理作家協会により、ミステリー／犯罪小説に贈られる文学賞として、ダガー賞（翻訳部門）を受賞したとのことである[(1)]。日本人初の受賞、しかも暴力シーンが多い作品の女性作家という事で、評判になっていたことが思い出される。

ダガー賞受賞の報道後、文庫本（河出文庫）を購入した。本を読む前には、暴力のシーンやストーリーに巧みに埋め込まれた「トリック」に自己の関心が焦点化されるのかと思っていた。本を読んでみると、確かに壮絶な暴力がふんだんに描かれ、どんでん返しに遭い、あわててページを戻して読み返すなどしたのはその通りなのだが、わたしがこの作品で強く心を打たれた部分は、暴力そのもののすさまじい描写やどんでん返しではなく、別のところにあった。

主人公の依子が、運転手役・見守り役をしていた尚子を連れて暴力団（尚子の実家）から逃亡するさいに、暴力団の手下であった柳に、「妻」（依子）と「妹」（尚子）ということにすれば、一緒に逃れられる、と持ち掛けられたときのことである。依子は一瞬考え、「誰かの何かとして生きるのは、無理だ」という言葉を放った。

二つ目は、幼いころから祖父に闘う力を鍛えられ、腕っぷしのいい依子が、最も怒りを込めて暴力を爆発させるくだりで現れる。暴力団の頭である父（内樹）は尚子にたいし、意のままの女性に育てようと習い事をさせ、好きな洋服も着させず、婚約者（これもまた暴力団）まで決めていたが、こともあろうに、結婚する前に、尚子をレイプしようとしていたのだ。「何を、してる。あんた、父親だろうが…」と震わせながら発した声は、これまでの暴力シーンで経験したことのないほどの感情の高ぶりを伴っていたのである。

「誰かの何かとして生きること」や、父親からの性的暴力（性虐待）は、女性が家族や社会の中で生きていく上での葛藤を象徴的に表現したものであり、学術的にも検討されてきたジェンダー問題である。心理学においては、フロイト（Freud,S.）が創始した精神分析理論において、近親相姦への無意識的な願望と人格のありようについて理論化が試みられた。幼児期の子どもは異性の親に性愛を抱き、結婚したいという願望を抱くのだが、去勢不安や罪の意識から、幼児期の終わりごろから学童期にかけて、父親役割・母親役割などを内面化したいわゆる「超自我」（パーソナリティを構成するもの：道徳律・良心など）を形成するというものである。

フロイトによるこうしたエディプス・コンプレックス[(2)]（近親相姦的な願望による複雑な葛藤）は、基本的に子どもの側の無意識的な衝動（いわゆるリビドー）の発揚・高まりとそのことを抑え、あ

きらめに導かれる過程での去勢不安と親への同一視（取り入れ）というように、子どもが発する願望を契機にしたものである。それにたいし、『ババヤガの夜』での近親相姦は、強大な権力を持つ父親による娘への実質的な暴力である。尚子を自分の意のままに育てようとして、心のみならず身体までをも蹂躙しようとした内樹にたいして怒りを爆発させたのは、依子が思う「絶対に許されない暴力」の阻止であったことは、これまで見せたことのない感情の動きの描写から見て取れる。以前、集団レイプから依子を救った尚子を守るための壮絶な闘いは、二人の連帯をその後の人生の旅に紡いでいくことになる。

フロイトの影響を受けたエリクソンは、この理論を発展させ、社会・心理的な危機を軸にして人生を8つの段階に分け、その段階で最も優勢となる危機に注目して、各段階の葛藤について言及した理論家である。

「誰かの何かとして生きるのは、無理だ」という依子の発した言葉は、発達心理学者エリエリクソン（Erikson,E.H.）が打ち立てた心理・社会的なパーソナリティ理論を貫く「アイデンティティ」の概念に通じる言葉である。エリクソンは、人生を通した8つの段階において、個々の段階で最も重要となる心理・社会的な危機を設定しているのだが、一方で、実はどの段階においてもそれらの8つの危機は生じうることを理論化しており、8つの段階を通じて最も重要な概念として、「アイデンティティ」を設定している。

「アイデンティティ」は難しい言葉であるが、「自分はだれでもない自分である」「これこそが自分である」というような感覚とでもいおうか。エリクソンはとりわけ、青年期において、「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」という心理･社会的危機が優勢になるとしている。たしかに、これから大人社会に入っていく青年期において、これからの仕事、自分の適性、社会から期待される役割などをめぐり、自分はどうすればいいのか、何を学べばいいのか、どんな仕事をすればいいのか、思い悩むことがおうおうにしてある。

依子の「誰かの何かとして生きるのは無理」という言葉は、依子の心情のみならず、絶大な権力を持つ父親のコントロールの下、「一人の人間として、一人の女性として」ではなく、これまで、暴力団の組頭である「内樹の娘」として、また結婚後は、父親が決めた相手である「宇田川の妻」としてふるまい、生きなければならない尚子の心情をも表している。

依子の内樹への暴力は、いまだ自分の人生を生きられず、人権を蹂躙され続けている女性たち・娘たちの気持ちを爆発させたものであり、昇華である。尚子（娘）を救ったのは、自らも内樹から蹂躙され内樹の手下と逃亡した母・由紀江ではなく、徐々に信頼関係を構築していった、はじめは見も知らぬ存在であった依子であったことにも注目したい。とりわけ外からは可視化しづらい家庭のなかでの暴力をあばき、くさびを打ち込むこと、そこに必要なのは家族以外の女性との連帯が重要なのだという事をもこの小説は気づかせてくれる。

ダガー賞受賞の価値は、激しい暴力やスリリングな展開、どんでん返し、という本作の巧みな構成や内容にとどまらず、直接的な暴力の背後にある女性への人権蹂躙を、暴力により逆照射したことにあるのではないか。そして依子の暴力へのセンスを養い、依子を育てた祖父母の思いにも読者を導き、女性の連帯を鼓舞した。女性は『ババヤガの夜』を読んで、スカッとして自尊心を取り戻

し、勇気をインスパイアされ、女性と連帯するのだ。本書の価値はまさにここにこそあり、だからこそ私を含めた多くの女性読者を惹きつけるのだろう。

《注》

(1) 河出書房（2025） 王谷晶『ババヤガの夜』が英ダガー賞受賞。日本人初https://www.kawade.co.jp/news/2025/07/post-279.html （2026年3月8日閲覧）

(2) フロイトによるエディプス・コンプレックスにかかわる議論は、フェミニズムをはじめとして多方面から批判的な検討がなされていることに留意されたい。

（文責：田口久美子）

2025年度
ジェンダー・ダイバーシティ研究所
活動報告

田口 久美子・奈良 玲子・野澤 和世

2025年4月12日
『女性のためのキャリアデザイン －学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて－』発行（ムイスリ出版）

物価が高騰する一方で、収入が思うように増えず、人々の生活はなかなか豊かにならない時代が続いている。ジェンダー平等が叫ばれながらも、非正規雇用が多く、賃金格差や生活苦にあえぐ女性たちがいる。寿命が延び、90年、100年と長い人生を歩む時代になった現代、女性が生涯、自分の人生を自分のものとして設計し、生きていくためにはどうすればよいのか、課題が山積している。

『女性のためのキャリアデザイン―学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて―』（ムイスリ出版, 2025）は、こうした認識のもと、女性が自分の人生を豊かに営むことをめざして編集されたものである。本書を通じて、現代の女性たちが置かれた実態をみつめ、女性が社会で自分らしく生きていくための壁について考え、その壁はどこから生じているのかを考え、ともに解決策を考え、共生社会を構築することを目指して、女性をめぐる統計や理論をふんだんに盛り込み、社会的・歴史的観点から女性の在り方を論じた。

執筆は、研究所代表である田口のほか、研究員の奈良玲子、福原充、野澤和世が担当し、特定の専門領域やグローバルな女性のキャリアについては、他大学の研究者にお力添えをいただいた。田口はキャリアに関する基礎的な知識・理論、女性に関するデータ（ジェンダー統計）、とりわけ女性の生きづらさにかかわる暴力、労働、災害などを担当した。

奈良は、いまだに家父長制の漂う介護の問題と自身のジェンダー研究のフィールドであるイランの女性の在り方について執筆した。福原は、生涯学習の歴史的系譜を紹介し、学校教育での男女共学について大正デモクラシーや旧教育基本法制定の歴史から論じ、ジェンダー社会推進で世界に後れを取る日本の実態と課題を浮き彫りにした。執筆当時、進路支援に従事していた野澤は、定評のある和洋女子大学の進路支援の概要とポイントを論じた。

このほか、終章では、女子大学のキャリア教育の実践例として和洋女子大学を例に、本学のユニークな取り組みである、高大接続7年生プログラム（通称和洋コース）を紹介し、キャリア教育を推

進する研究機関としての当研究所の取り組みに触れている。

こうして、本書は、女子大学をはじめとして、大学でのキャリア教育の教科書として重要な事項を網羅していることに加え、本学独自の進路支援や教育・研究の取り組みをも紹介するユニークな仕上がりになっている。本学独自の取り組みの紹介は、単なる「紹介」にとどまらず、日本の女子大学全体をもエンパワーしうる内容になっていると自負している。

そのことは、奈良の受講生が発した、「この本を結婚するときに、相手にも読んでもらいます」との感想で裏付けられよう。本書の刊行は、本学ホームページにおいても公開された。

2025/05/23 トピックス

ジェンダー・ダイバーシティ研究所の田口久美子氏監修の共著『女性のためのキャリアデザイン』が刊行されました

和洋女子大学の総合研究機構「ジェンダー・ダイバーシティ研究所」の田口久美子研究員と、同研究所の研究員である全学教育センターの奈良玲子准教授、福原充助手による共著『女性のためのキャリアデザイン～学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて～』(ムイスリ出版 2025年4月)が刊行されました。

この本は、自分の人生(キャリア)を、どうつくりあげていくかを、女性のライフイベントを縦糸に、ジェンダーを横糸に紡いだものです。長寿時代、AIの到来、度重なる災害など、社会変動が激しい時代において、自分が生きたい人生をどう作り上げていくのかについて、重要な知識や理論が展開されています。学校法人 和洋学園の卒業生の力強いエピソード(第11章：災害と女性)や和洋女子大学の進路支援センター前室長 野澤和世氏の文章は、和洋学園に通う生徒・学生たちへのエンパワーとなるに違いありません。ぜひ、お手に取ってご一読ください。

<ジェンダー・ダイバーシティ研究所>

和洋女子大学 総合研究機構の中の1つである、ジェンダー・ダイバーシティ研究所は、ジェンダー格差の解消ならびに、障害をはじめとして子どもや学生・人々の多様な困難の解消をめざし、すべての人々が安心して社会参加や生活ができる共生社会の構築に向けて、研究を行っています。さらに、女子大学の使命として、女子大学の存立意義を社会に問いかけ、女性が生涯にわたり権利を行使し、豊かな人生を実現できる教育について研究します。

https://www.wayo.ac.jp/news/2025/05/news_0523　より掲載

2025年5月～6月
月経衛生デーへの参加

月経衛生デー（Menstrual Hygiene Day）は、毎年5月28日に世界中で実施される啓発デーである。月経に関するタブーをなくし、すべての人が安全で衛生的な環境で生理を管理できる社会を目指している。発展途上国では衛生用品の不足や教育の欠如が課題となっており、日本を含む先進国でも職場や学校での理解促進が求められている。

月経と健康、ウェルビーイング、環境課題への関心の契機、ジェンダーにとらわれず月経を語る機会を創出すること、これらを目的として、一般社団法人newbeが主催するイベントの趣旨に賛同し、和洋女子大学もイベントに参加することになった。

学生に対し、タンザニアと日本を結んでのオンライントークイベントや月経教育の講演を周知し、竹の素材の生理用品を使って、使い心地や環境問題についてコミュニケーションを高めるイベントに参加した。

イベントの協賛企業である、VVVが開発・販売している、竹を材料とする生理用品（limerime）を使って月経と健康、ウェルビーイング、環境問題についてコミュニケーションをして、ジェンダーにとらわれず月経について自由に語り合える対話の場を広げる、というイベントである。

6月10日（火）、6月12日（木）、6月13日（金）にlimerime生理用品の受け渡しを行った。100名以上が生理用品を受け取り、月経についてのコミュニケーションを広げた。

limerime生理用品の受け渡しの様子は、本学HPにも公開された。

【写真】学生たちにイベントの趣旨を説明する
奈良玲子准教授

https://www.wayo.ac.jp/students/news/2025/students_0613より掲載

2025年7月19日（土）
千葉市男女共同参画センター第三期さんかくカレッジ講師①
（田口久美子特別研究員）

日程：2025年7月19日（土）14：00 ～ 16：00

会場：千葉市男女共同参画センター

千葉市では、男女共同参画の遅れや、性別役割分業観が強い傾向があることなどの背景を受け、地域で男女共同参画を推進できるファシリテーターの育成を目指し、「さんかくカレッジ」という講座を開講している。

第3期は、「ジェンダー視点から生活を見つめ直す」をテーマに、「家庭・学校・仕事」に潜むアンコンシャスバイアスやその対処法について学ぶ講座になっており、第1回目（男女共同参画の基礎知識）を特別研究員田口久美子が担当した。また、第5回目（11月8日）を奈良玲子准教授が担当した。第1回目から第5回目の様子はこちら：https://www.chp.or.jp/event/sankaku_college3/

第1回目では、男女共同参画に関する国際的な状況や日本の状況、さらには千葉県や千葉市の男女共同参画の状況を具体的な数値や項目で確認し、2回目以降の具体的な生活場面での男女共同参画の学習への基礎的な知識を紹介した。とりわけ千葉市の、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」（%）での「賛成」の高さや、「反対」よりも「賛成」が上回る実態には参加者から驚愕の声が上がっていた。

千葉市　賛成（44.6）＞反対（39.7）　わからない（14.2）　無回答（1.4）

全国　　賛成（33.4）＜反対（64.3）　わからない（0.1）　　無回答（2.2）

参加者は熱心に講義やディスカッションに参加し、千葉市の男女共同参画の向上に向けての知識や技能の獲得の場となった。

【写真】講師を務める
田口久美子特別研究員

【写真】講座のサポートで
奈良玲子准教授も参加

千葉市男女共同参画センター主催「第3期さんかくカレッジ」の講師を和洋女子大学の教員や研究員が務めます ¦ 和洋女子大学　より引用

2025年9月3日（水）15：00 ～ 17：00
女子大学連携ネットワーク第10回ミーティング

女子大学連携ネットワークは、2018年3月、京都光華女子大学、京都女子大学、同志社女子大学の3つの大学が中心となってキックオフしたゆるやかな女子大学の連携ネットワークである。これからの女子大学が取り組む課題などについて情報交換を行い、協力体制を構築し、日本の女子大学が果たす役割をともに考え、語り、発信し、学術的成果を提示するとともに、社会貢献の足がかりとすることを目的としている。

これまでシンポジウムを2回、ミーティングを9回開催し、和洋女子大学は2019年から幹事校としてネットワークの運営に加わっている。2025年度は第10回、第11回のミーティングを実施し、和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所が幹事校として両回の事務局を担当した。

幹事校：大妻女子大学、京都光華女子大学、京都女子大学、実践女子大学、同志社女子大学、宮城学院女子大学、和洋女子大学（あいうえお順）

記念すべき第10回ミーティングでは、女子大学の可能性と課題－今こそ女子大学の存在意義を考える－をテーマに、2年ぶりに、和洋学園九段フォーラムにおいて対面で開催し、直接の対話により大学間の連携を深め、女子大学の魅力と課題を語り合う場となった。

【基調講演】

女子大学の魅力―女子大学在校生は女子大学に何を期待するのか―

同志社女子大学現代社会学部教授　塘利枝子

【情報提供】

〈反対〉から〈アライ〉へ―人権が見えたそのときと、そこからの実践

宮城学院女子大学一般教育部教授　間瀬幸江

【ディスカッション】

基調講演での、女子大学生は女子大学でのびのびと意見を言うことができる、また女子大学の強みをもっとアピールしてほしいとの意識に関する報告や、情報提供からの、人権を尊重する取り組みと教師としてのとまどいなどの報告を受け、全国12大学の28人の参加者が6グループに分かれて熱いディスカッションを行い、女子大学の可能性と課題について情報共有を行い、あらたな方策へのヒントを得る機会となった。

女子大学連携ネットワーク
第10回ミーティングフライヤー

【写真】 講演の様子

【写真】ディスカッションの様子

2025年10月5日（水）9：30 ～ 12：00
国際ジェンダー学会でのラウンドテーブルに参加
（田口久美子特別研究員）

国際ジェンダー学会2025年大会（フェリス女学院大学）において、特別研究員の田口久美子がラウンドテーブルディスカッション～「女子大学におけるジェンダー研究センターの意義と役割－その可能性と課題」での「応答者」として参加した。

このラウンドテーブルは、本学が幹事校をつとめる女子大学連携ネットワークでのつながりを起点として実現したものであり、フェリス女学院大学のジェンダースタディーズセンター長の藤巻光浩教授が企画者となり、宮城学院女子大学の天童睦子名誉教授、聖心女子大学濱口壽子教授、フェリス女学院大学大学院生鶴岡希美さんが話題提供を行った。

話題提供では、女子の就学率が低かった明治時代に、女子に教育を授ける場としてミッション系の女子校が開設されたことを共に振り返り、女子大学や女子教育の原点を確認した。

また、女子大学のジェンダー関連の研究所の取り組みを共有し、女子大学でのジェンダー教育の可能性や課題、地域（の大学）との連携の在り方について共有した。また、国際的な視点から、海外（フィリピン）のジェンダー関連施設の実態について共有した。

コメンテーターの田口は、女子大学への風当たりが強いなかで、女子大学（女子校）の歴史的な原点の理念である「教育を平等に受ける権利」や女子大学の存続の意義について言及し、女子大学のジェンダー研究所・研究センターは、女性の豊かな人生を実現するための研究・活動を行う役割を有するとした。また、ジェンダー平等の推進に向けて、研究所連携、大学連携がさらに重要になるとして、和洋女子大学が幹事校としてかかわっている女子大学連携ネットワークの意義についても示唆した。

【写真】当日の様子

https://www.wayo.ac.jp/visitors_general/news/2025/general_1027　より引用

2025年10月14日（火）
就職情報サイト「JobRainbow」の星賢人氏を講師に招いての LGBTQ＋に関する講演会の開催（協力）

就職情報サイト「JobRainbow」の星賢人さんをお招きして、LGBTQ＋の講演会を開催した。主催は、大学コンソーシアム市川キャリア支援部会（千葉商科大学、昭和学院短期大学、和洋女子大学、東京経営短期大学、環太平洋大学）。ジェンダー・ダイバーシティ研究所は、市川市商工課とともに、このイベントに協力した。

星賢人さんによる講演（第1部）の後、第2部では、市川市就労支援事業についての説明があった。学生や教職員など、多くの参加があり、星さんによる、「多様な性を知る」と題した講演に耳を傾けた。自分自身は何者か、という悩みは、多くの青年たちが抱える葛藤である。なかでも性に関する葛藤は、自分自身は何者か、仕事や恋愛をどう考えるのか、ということにかかわって、青年の大きな悩みとなる。多様性の概念が少しずつ浸透してきた日本であるが、人々を女性/男性というくくりで考えることが多いまだまだ多い時代においては、性の多様性に理解のある社会の構築が必要である。星さんの講演内容は、これからの日本において、働く場をはじめとして、生活における性のダイバーシティの理解を推進していくうえで、非常に有益な講演となった。

和洋女子大学ホームページ10月14日（火）、就職情報サイト「JobRainbow」の星賢人氏を講師に招いてLGBTQ＋に関する講演会を開催します ¦ 和洋女子大学　より引用

2025年11月8日（土）
千葉市男女共同参画センター
第三期さんかくカレッジ講師②
（奈良玲子研究員）

日程：2025年11月8日（土）14：00 ～ 16：00
会場：千葉市男女共同参画センター

【写真】講師を務める奈良玲子准教授

千葉市文化振興財団千葉市男女共同参画センターより提供

第三期さんかくカレッジ講座は、「ジェンダー視点から生活を見つめ直す」を全体テーマとして、田口久美子特別研究委員をトップバッターに全5回開催された。奈良玲子研究員が担当した最終回では、その総括として「ジェンダー平等実現のためにできること―『可視化』をとおして平等と多様性を再考する：ケア労働を中心に―」を主題に据え「可視化」をキーワードとする参加型ワークショップ形式の講義を展開した。

第1部では、2022年のイランにおけるヒジャブ事件を取り上げ、宗教的装いという「可視化できる」イスラームが女性の社会参画にどの様に関わっているのかを紹介した。イスラーム法に基づく規範は女性の行動や服装に制約を及ぼしているが、同時にヒジャブの着用を通して「規制を尊重する模範的イスラーム女性」として社会的承認を得ることが、専門職への参入や公的領域での活動を後押しする側面も見られることに言及し、宗教的シンボルは抑圧とエンパワメントという相反する側面をあわせもつ存在であるという点を強調した。

第2部では、日本社会における家族介護に焦点を当て「可視化されにくい」無償のケア労働の実態について整理した。統計データから家族介護の担い手が依然として女性に偏っている現状が読み取れることを踏まえ、その背景にある家父長的価値観や「女性はケア労働を担う存在である」というジェンダー規範などの文化的要因について検討した。また、介護に伴う感情的負担や孤独は数値化されにくく個人の問題として抱え込まれやすい点についても触れた。多くの受講生が何らかの形で介護に関わった経験を有していたこともあり、会場では自身の体験に基づいた積極的な意見交換が行われた。

ワークショップでは、これらの問題を個人の努力や責任に帰すのではなく、社会構造の課題として捉え直す視点を共有した。自助・互助・共助・公助を組み合わせたケアの仕組みや、「脱ワンオペ」の必要性について意見交換を行い、「可視化できる制度的課題」と、「可視化されにくい生活実態」の双方に目を向ける重要性を確認した。

2025年12月10日（火）
ジェンダー・ダイバーシティ研究所１周年記念映画観賞会

125周年の記念事業として設立された和洋女子大学総合研究機構ジェンダー・ダイバーシティ研究所の1周年記念事業として、映画上映会を開催した。

上映作品は、世界各国の映画祭で数々の賞を受賞し、文部科学省選定作品にもなった「取り残された人々：日本におけるシングルマザーの苦境」（2024年劇場公開作品）である。

作品の視聴を通して、現代の日本における「隠された貧困」と女性、特にシングルマザーが直面している苦悩について考える機会とすることを目的とした。学生・教職員だけでなく、一般の方にも広く参加を呼び掛け、地域の方々を含め100名が参加した。

前半の第1部は映画上映（78分）。後半の第2部では、映画監督（ライオーン・マカヴォイ氏）のほか、出演した方にも加わっていただき、トークセッションが繰り広げられ、質疑応答も熱く行われた。

■映画上映会スケジュール

開催日：2025年12月9日（火）

時　間：15：00 ～ 17：00（14：45開場）

場　所：和洋女子大学　西館1-4教室

【写真】映画に出演された方（左）とライオーン・マカヴォイ氏（右）

【写真】挨拶をする岸田宏司教授

【写真】司会の奈良玲子准教授

【写真】質問をする来場者たち

【写真】映画に関する話や、来場者からの質問に答えるライオーン・マカヴォイ氏と出演者

写真はすべてhttps://www.wayo.ac.jp/visitors_general/news/2025/general_1215　より引用

2025年12月15日（月）～16日（火）
宮城県フィールドワーク
（田口久美子特別研究員）

みやぎ教育相談センター（仙台市）　瀬成田実所長から聞き取り

宮城県では不登校児童生徒が多く、いわゆる発達障害の子どもへの合理的配慮が十分になされていないこと、1学級当たりの子どもの数が多く、県独自の政策が実現できていないこと、などが語られた。東日本大震災後の子どもたちの分析と対応が喫緊の課題であることが明らかになった。アクセスはこちら　https://www.forestsendai.jp/soudan/

放課後こどもクラブBremen理事長（石巻市）　宝鈴子先生から聞き取り

石巻市では、公立学童クラブの民営化が進んでいること、そのことにともなって、個々の学童クラブでの防災対策や訓練がきちんとなされることが必要であること、それぞれの学童クラブの個性を遊びや保育を通して、いかにして発揮していくのか、などが問題になっていると話された。アクセスはこちらhttps://bremen-ishinomaki.org/

一般社団法人こころスマイルプロジェクト（石巻市）　志村知穂代表理事から聞き取り

志村知穂さんは、震災で身内を亡くしたご家族や子どもたちを物心両面で支え、小学校での「駄菓子屋ワゴン」などさまざまな取り組みをされている。さらに支援の幅を広げ、被災者以外の虐待を受けた子ども・家族への支援にも取り組まれている。東日本大震災後子どもたちが本音を吐露するまでの葛藤の深さが語られ、震災後のメディアや社会的支援の在り方への示唆を得られた聞き取りであった。アクセスはこちら　https://kokoro-smile.org/

童話作家千葉直美先生（石巻市）から聞き取り

千葉先生は、現在石巻市内の小学校で、スリランカ出身の子どもへの支援員をされていると同時に、震災で亡くなったアメリカ出身の英語講師、テイラー・アンダーソンさんの記念事業に携わっておられる。また震災直後から石巻の女性たちへのインタビューを100人以上継続され、女性たちの中には、震災後、前向きに自らの生活を送ろうとした女性がいたことや、外国にルーツを持つ子どもにたいする言語獲得・教科学習への手厚い支援が必要であることが語られた。

＜まとめ＞

東日本大震災から15年がたとうとしているが、子どもや人々の心とからだの復興は、いまだ道半ばであることが、今回のフィールドワークから明らかになった。本音を押し殺して周囲の前で明るくふるまい、メディア（大人）が期待するような言葉を発した子どもたちは、自らの心を偽り、心の傷をさらに大きくしていることが推測された。被災したときに幼かった子どもが成長し大人になってからようやく本音を吐露できるようになったエピソードから、長期的な支援への示唆が得られた貴重なフィールドワークであった。

2025年12月～2026年2月
和洋教育プログラム（和洋コース）第一期生インタビューの開始
（奈良玲子研究員、福原充研究員、田口久美子特別研究員）

和洋学園では、2020年度より和洋コース（高大接続7年制　和洋共育プログラム）を設定した。このコースは、和洋国府台女子高等学校と和洋女子大学との間での7年間にわたる包括的な高大連携教育プログラムである。このコースに入学すると、生徒は基本的に和洋女子大学への入学を約束され、高校2年生の時から和洋女子大学の共通総合科目（一部の科目を除く）を履修することができ、最大で24単位までを履修可能とするものである。ともに市川市国府台の同一のキャンパス内に位置しており、高校の建物から大学の教室まで数分で移動できるというメリットもこのプログラムを後押している。

和洋コースの高大連連携プログラムの具体的な内容を紹介する。高大連携プログラムとして実際に大学の授業を受け始めるのは、高2からである。高校2年生の前期に、大学での学びの基礎づくりをする科目として、「ベーシックラーニング」（2単位）を学ぶ。この科目は、その名の通り、大学で学問を学ぶための基礎固めを行う科目であり、文章を読むこと、文章を書くこと、数的処理を中心に、課題に取り組むものである。

第1期生（38人）の指導には、全学教育センターの湊久美子教授（当時）と奈良玲子助教（当時）が担当した。読む教材としては、エッセイや新聞記事などの日常的な文章ではなく、「論文」などの学術的で高度なものを積極的に取り入れた。高校でも学ぶような文章教材では大学の講義として学ぶにはふさわしい教材ではないと考えたからである。文章を「書く」ことにさいしても、毎回の授業の仕上げとして課すミニレポートに湊教授と奈良助教が個々のミニレポートに赤入れを行い、丁寧にフィードバックを行った。数的処理については、苦手感のある生徒もいたようであるが、まずは取り組むことで問題に慣れることを重視ししつつ、苦手感をやわらげることを重視した。

後期の「キャリアデザイン」では、キャリアについての概念の説明をおこない、これからの個々のキャリア形成をにらみ、和洋女子大学の学部・学科の説明を各学科の教員や在籍する先輩学生から行い、大学で学ぶ内容とその後のキャリア形成についてのイメージを膨らませた。そのうえで、自己と社会とのあり方を学ぶ社会調査とプレゼンを行った。キャリア形成をするうえで、どのような問題があるのかを社会からとらえ、その問題がどこから生じるのかを考え、自己のキャリア形成に向き合うという趣旨である。第1期生が高2を迎えた2021年度はコロナ禍の影響が残り、社会調査の実施では制約があったが、生徒たちは粘り強く課題に取り組み、発表までをなしとげた。

高校2年生の時のこれらの学びをとおして大学で学ぶ基礎を養い、高3から本格的に始まる総合共通科目の履修の準備をしたわけであるが、高2や高3での総合教育科目の先取りは、大学での学びや生活にどのような影響があったのかをインタビューを通して検証することを目的として、2025年12月から第1期生に聞き取り調査を開始した。2026年度にデータの分析・考察を行い、論文等で広く社会に公表をする予定である。

2026年1月27日（火）
宮城学院女子大学国際シンポジウム－「子ども・女性のエンパワーメントと包括的ウェルビーイング：地域からの発信」への参加
（田口久美子特別研究員）

子どもと女性のウェルビーングを包括的にめざす取り組みにむけてのシンポジウムが、宮城学院女子大学キャリア支援センター主催で行われ、東フィンランド大学教授のリーッタヴォルナレン先生による基調講演、宮城学院女子大学名誉教授足立智昭先生からの話題提供、宮城学院女子大学の学生さんからの質問・感想ののち、特別研究員田口久美子がコメントをおこなった。

ヴォルナレン教授からは、フィンランドのウェルビーングにかかる福祉政策について理論と実践面から話題提供が行われ、人々のウェルビーングの実現には、having,loving,being の3つを充足する福祉政策が必要であることが話題提供された。足立教授からは、能登半島地震で被災した地域における祭りは、歴史的に文化を紡ぐものとして地域と子どもたちをつなぐ役割を果たし、子どもや人々の信頼関係や居場所となりうることが言及された。お二人の話題提供を踏まえ、田口は、東日本大震災後の放課後こどもクラブが女性と子どものウェルビーングを実現するとして、石巻市の放課後児童クラブBremenを紹介した。

イベントのURLはこちら　https://news.mgu.ac.jp/placement/news/5624.html

2026.1.27　宮城学院女子大学国際
シンポジウムフライヤー（表）

2026.1.27　宮城学院女子大学国際
シンポジウムフライヤー（裏）

2026年3月2日（月）18：00 ～ 19：30
女子大学連携ネットワーク
第11回ミーティング

女子大学連携ネットワーク第11回ミーティング（2025年度2回目）がオンラインにて、下記のとおり開催された。女子大学連携ネットワークは、2018年3月、京都光華女子大学、京都女子大学、同志社女子大学の3つの大学が中心となってキックオフしたゆるやかな女子大学の連携ネットワークである。和洋女子大学は2019年から幹事校としてネットワークの運営に加わり、2025年度は10回、第11回のミーティングを実施し、和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所が第10回目に引き続き、第11回も事務局を担当した。

幹事校：大妻女子大学、京都光華女子大学、京都女子大学、実践女子大学、同志社女子大学、
　　宮城学院女子大学、和洋女子大学（あいうえお順）
テーマ：女子大学の可能性と課題―今こそ女子大学の存在意義を考える―パート2
日時：2025年3月2日（月）18：00 ～ 19：30
開催方法：オンライン（ZOOM）

【基調講演】
○岐路に立つ女子大学―大学案内と当事者の語りからみるリアリティ―
　同志社女子大学現代社会学部准教授　　新谷龍太朗
　武庫川女子大学教育総合研究所所長　　志水宏吉

【話題提供】
○Z世代女子学生の意識：女子大生と共学生
　実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所所長/生活科学部教授　髙橋桂子
○女子大学の存続意義を問う―聖心女子大学グローバル共生研究所の取り組みから―
　聖心女子大学グローバル研究所兼任所員/現代教養学部教育学科教授　杉原真晃

【コメンテーター】
　神戸松蔭大学文学部准教授　稲見直子

参加者（申込者）：68名

第11回ミーティングでは、第10回目に引き続き、女子大学の可能性と課題―今こそ女子大学の

存在意義を考える―パート2と題して、オンライン形式によりシンポジウムを開催した。基調講演、話題提供ののち、ディスカッション（質疑応答）を行い、女子大学の魅力と課題をともに考える場となった。女子大学の共学化や閉校が報道され、女子大学への逆風が吹き、その使命はおわったとする風潮もある中で、抗するものを女子大学はたくさん持っているという事、女子大学の存続意義をあらためて感じたシンポジウムとなった。

女子大学連携ネットワーク
第11回ミーティングフライヤー

女子大学連携ネットワーク
第11回ミーティング登壇者・
幹事校記念写真

2025年度
研究員・特別研究員の１年間の
ジェンダー・ダイバーシティに関する
活動・業績

（あいうえお順）

岸田宏司（研究員）

- 「企業等から福祉へ」2025年度　神奈川県福祉推進事業
- 福祉職員キャリアパス対応生涯研修課程　指導者研修講師　2025年　全国社会福祉協議会
- 令和7年度社会福祉施設長資格認定講習課程　「老人福祉論」研修　2025年度　全国社会福祉協議会
- 令和7年度社会福祉主事資格認定通信課程公務員課程　「老人福祉論」　2025年度　全国社会福祉協議会
- 令和7年度社会福祉管理職キャリアパス対応生涯研修　宮崎県社会福祉協議会　2025年度
- 市川市社会福祉審議会　介護保険計画、高齢者福祉計画、障碍者福祉計画の推進状況に関する審議　市川市地域共生課　2025年度
- 「弱さが社会を支えている―ウーフニックの精神と現代の相互扶助」全国社会福祉協議会　未来ふくし塾　講義収録　2025年度

田口久美子（特別研究員）

- 「保育の質を考える：保育者の専門性の観点から（3）第4章　児童館併設の学童保育で働く人たちの資格と専門性」明星大学社会学部研究紀要 45,70-80（2025年3月）
- 『女性のためのキャリアデザイン―ともにつくる社会の構築をめざして』（田口久美子監修、2025年4月12日発行、ムイスリ出版、第1、2、３、5、６、9、11章執筆）
- 心理科学研究会2025年春の研究集会（於名城大学）　ジェンダー分科会発表「ジェンダーと交差性」（2025年4月27日）
- 国際ジェンダー学会2025年大会個人発表（共同）「特別支援学校教員における性別職務分離―インタビュー調査の分析から―」2025年10月4日（於フェリス女学院大学）

- 国際ジェンダー学会2024年大会ウンドテーブルディスカッション「女子大学におけるジェンダー研究センターの意義と役割――その可能性と課題」2025年10月5日（於フェリス女学院大学）
- 心理科学研究会2025年秋の研究集会（オンライン） 全体シンポジウム「戦争と心理学 パート2―学校や地域での暴力に心理学者はどう向き合うか」コーディネーター（2025年10月12日）
- 「学校教員のキャリア形成と同僚性の現状：全国教員調査の分析から」『北海道教育大学紀要（基礎研究編）』第77巻 pp. 1-10, 木村育恵ほかと共著（2025年11月）
- 市川市民祭への参加（市川BBSのブース―お面づくりに参加、2025年11月3日）
- 「学校教員の性別職務分離―全国教員調査の結果から―」『東アジア教育研究』第21号 酒井秀翔ほかと共著（2026年1月） The Journal of East Asian Educational Research Vol.21 January, 2026,pp.83-97
- 市川市妙典中学校での生徒会の生徒さんとの交流会（市川BBS会、市川市保護司会、市川市更生保護女性会との合同開催；2025年12月3日）
- 『心理学からみるコロナ禍と人のこころ―心理学者はコロナとどう向き合ったか』（2026年3月、ミネルヴァ書房、共著）

奈良玲子（研究員）

- 社会教育団体バイオサイエンスにてワークショップ型講演「女性のライフデザイン：私のこれまでを振り返り、これからを考える―キャリア・趣味・学び・交流を中心に―」2025年4月3日（於船橋市民文化ホール）
- 『女性のためのキャリアデザイン―学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて―』田口久美子監修、ムイスリ出版、2025年4月12日発行、第8、12章執筆。
- 社会教育団体バイオサイエンスにて講演「イラン近現代における女性表象の変容―パフラヴィ朝王妃とイスラーム革命後の宗教指導者妻の比較を中心に―」2025年8月27日（於東部公民館）
- 市川学Ⅱ（市川の商業化と社会問題）「多様性を主体とする市川へ―市川市におけるこども食堂と夜間中学校の事例を中心に―」2025年9月8日（於千葉商科大学）
- 国際ジェンダー学会2025年大会ラウンドテーブルディスカッション「イラン女性の高学歴化に表出される建前と世間的まなざし」2025年10月5日（於フェリス女学院大学）
- 競争的研究資金：NUC：公益財団法人日本ユニフォームセンター「ユニフォームの影響力と感情労働マネジメントの相互関係―対人サービスにおける女性の意識を中心に」（2024年10月1日 1 ～ 2025年8月20日）。関連掲載記事：「日刊繊維ニュース特集 感情労働と制服の

関係性/NUC基礎研究助成事業から」『THE SEN-NEWS』2026年1月30日。「クローズアップ: NUC基礎研究助成事業制服と“感情労働”の関係性」『Uniform Plus』Vol.217、2026年JAN.

- 千葉市男女共同参画センター・第3期さんかくカレッジ「ジェンダー平等実現のためにできること―「可視化」をとおして見つめなおす平等と多様性：ケア労働を中心に―」2025年11月8日（於千葉市男女参画センター）
- NUC：公益財団法人日本ユニフォームセンター定期セミナー講師「ユニフォームの影響力と感情労働マネジメントの相互関係―対人サービスにおける女性の意識を中心に」2026年2月17日（於NUC：公益財団法人日本ユニフォームセンター）
- 教育実践論文「和洋女子大学におけるキャリア教育効果に関する一考察―キャリアデザイン科目の学修テーマ別分析をとおして―」『和洋女子大学　全学教育センター　年報』第5号 pp.47-62、2026年3月1日
- 「日本版WISCの全体像とWISC-Vの改訂ポイントー先行研究に基づくレビュー研究：5つの主要指標を中心に―」『和洋女子大学教職教育支援センター年報』第13号　pp.9-16 、2026年3月10日
- 市川市市民活動団体補助金審査委員（任期：2024年11月～2026年10月）

野澤和世（研究員）

- 大学職業指導研究会第三分科会（ダイバーシティに関する研究会）の担当役員として下記の研究会を企画・運営した。

  年間活動テーマ：大学におけるDE&I（ダイバーシティ　エクイティ＆インクルージョン）の推進

  サブテーマ　　：大学内の支援体制づくりと企業・外部団体との連携を思索する

  第1回研究会　テーマ：「障害者雇用」について」2025年6月4日

  ・講演：障害者雇用促進企業の現状と課題

  ・講師：ANAグループ、本田技研工業株式会社

  第2回研究会　テーマ：「多様性」について　2025年9月3日

  ・講演：女性およびLGBTQ+学生の就職支援と活躍推進の現状と課題

  ・講師：NPO 法人J-Win、一般社団法人Cial Frame

  第3回研究会　テーマ：「アンコンシャスバイアス」について　2025年11月21日

  ・講演：アンコンシャスバイアスを知る、気づく、対処する

  ～ひとりひとりの学生の可能性が広がることをめざして

  ・講師：一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所
- 女性の発達障害における『見えにくさ』を踏まえた学生支援　筑波大学　2025年12月15日参加

福原充（研究員）

- 『女性のためのキャリアデザイン―学びあい、ともにつくる社会の構築に向けて―』田口久美子監修、奈良玲子・福原充編、ムイスリ出版、2025年4月12日発行（第7章、第13章、第14章担当）
- 和洋コース「ベーシックラーニング」ゲスト講師、2025年5月23日（於：和洋女子大学）
- Rikkyo University Mission チャペル主催公開講演会､「「日本」という異文化に生きて―ミャンマーからの難民として異国で生きるということ―」、ファシリテーター、2025年6月27日（於：立教大学）
- 「豊島区×立教大学 地域課題提言ワークショップ」、ゲスト講師、2026年1月10日（於：立教大学）
- 「特集論文　和洋女子大学における初年次教育としての「基礎ゼミ」:沿革と実態」福原充・松田麻子、『和洋女子大学全学教育センター年報』第5号、和洋女子大学全学教育センター、4-19頁、2026年3月1日

以上

2025年度ジェンダー問題をめぐる社会動向をふりかえって

2025年度も2024年度に続いて激動の年であった。日本で筆頭に挙げられるのは何といっても初の女性総理大臣の輩出であろう。第1次高市内閣は、若者世代を中心に支持を広げ、2026年2月8日に行われた衆議院選挙で300議席を上回る議席を獲得し、衆議院で自民党単独過半数の議席となった。

世界経済フォーラムが毎年公開しているジェンダーギャップランキングで日本は、2025年度も148か国中118位と低迷している。男性の参画を1.0としたときの、日本の女性の参画率は政治（0.085）、経済分野（0.613）、教育（0.994）、健康（0.973）であり、とりわけ政治での参画率が低く、女性の参画率は男性に比べ1割にも満たない。政治参画の指数に用いられる指標は、国会議員の男女比、閣僚の男女比、最近50年の行政府の長の在任年数の男女比となっているため、直近の衆議院選挙結果や高市首相の在任期間により政治分野の参画率の数値が若干上がる可能性はあるとはいえ、大きな上昇は見込めない。政治・行政分野での低迷はまだしばらくは続くだろう。

政治分野での参画で世界に後れを取る日本において、初の女性首相の輩出は、数の上で圧倒的に男性優位の政治世界における多様性の実現という文脈においては歓迎すべきことである。ただし、単に「女性である」ということをもって、「多様性」を実現する政治に実を結ぶかどうかには慎重な吟味が必要である。現時点で、高市首相が掲げる政策は、夫婦同姓制度を維持したまま旧姓を「通称」として使いやすくする、男系男子の皇位継承権の主張など、女性の権利向上の流れを阻むような政策が多い。夫の名字に変えなければならないことにより自尊心を喪失しアイデンティティの揺らぎに心を痛め、仕事や生活上での多くの不便さや不利を感じてきた女性たちの、選択的夫婦別姓制度の実現への希望をへし折らせてしまっているのである。

アメリカではトランプ第2次政権成立後、バイデン大統領が打ち出した「DEI政策」を撤廃し、教育、貿易、移民問題などにおける排外政策が著しい。また、意に沿わない国には高い関税をかけ、世界の国々や企業、人々を振り回している。強大な権力を盾に、意に沿わない人々・国々への暴力的な発言や政策について、自制を促しブレーキを掛けられる側近はいないようだ。

2025年度は、女性であることというマイノリティに複合的にマイノリティが合わさった複合的な差別―インターセクショナリティーの概念が社会に浸透していった年であったように感じる。日本でその役割を担ったのが、『部落フェミニズム』（熊本理抄編著、2025、etc.ブックス）である。この本では、部落出身である女性たちが、自らの出自を語り、家族や地域での女性の在り方を論じつつ、部落女性の問題が主流派フェミニズムの研究から遠ざけられてきたことを訴えた。

女性がいまだマイノリティであることは疑いようがない。しかしながら、すべての女性を同じカテゴリーでくくろうとするとき、より困難な生活を強いられている女性たちの苦悩や葛藤を可視化できないという誤謬を生じてしまう。女性の苦しみは一様ではなく、出自、障害など幾重にも折り

合わされた要因―インターセクショナリティを丹念に見ていくことで、女性の心の苦しみや実像に迫ることができるのであろう。フェミニズムにおける部落研究の付置の問題が、フェミニズムの分断ではなくフェミニズム研究の深化に向かうために個々のフェミニズム研究者に求められこととして、自戒を込めて思うのは、無自覚化の自覚ではないだろうか。無関心、無自覚性は、他の研究領域や社会一般においてもそうであるように、可視化されない暴力として、暴力を二次的にまた気づかれないような形で拡大させてしまう恐れがあるからである。

女性の性的搾取や性被害に関する事件や報道も多く見られた。2025年の初めごろから、元フジテレビ女性アナウンサーへの中居正広氏の性暴力がメディアで報道され始め、中居氏による性暴力を助長してしまったフジテレビの会社の構造が問題視された。こうした暴力を、テレビ局―タレントやタレント所属会社という、一般社会とは隔絶された特殊な社会での事件とするのは早計で、私たちの日常的な社会において、暴力（性暴力を含め）はいたるところにはびこっている。

数年前から問題になっているのが、ホストへの高額の売掛金を払えない女性を性風俗店や売春などで稼がせるというものである。女性の性風俗店などへのあっせんにより70億もの利益を得ていたスカウトグループが（再）逮捕されたことは記憶に新しい。女性を性の道具としてモノのように扱う人身取引は断じて許されない。タイ人の12歳の少女が東京の個室マッサージ店で働かされたという事件にも驚愕し、怒りがこみ上げた。

性風俗や売春にかかわる事件にとどまらず、学校現場での性加害も多く報じられた。男性教員による女子児童・生徒の盗撮の事件が多かったが、加害者は教員にとどまらず、同じ学校に通う男子生徒が加害者になる事件も多く、学校で性加害をなくすことは、喫緊の課題となっている。なにより、こうした事件の背景にあるスマホやSNSの利用・運用に関する法的規制も今後ますます重要になるだろう。

性加害や性暴力の件数が多くなり学校という日常の場での頻発が報道されるなど、生活上の安全や不安にかかわるニュースが多かったものの、2026年2月からの、緊急避妊薬（いわゆるアフターピル）の店頭販売のニュースは、不同意性交や性的暴行により望まぬ妊娠に不安を覚える女性たちにとっては、いくらかの朗報をもたらしたのではないだろうか。とはいえ、服用によるすべての妊娠を防ぐことは難しく、妊娠の可能性はゼロではないことにも留意が必要である。幼いころからのすべての人にとっての人権教育や包括的性教育が急務である。

世界中で戦火が生じ、いまなお戦時でのレイプは女性の心身に壮絶な傷を刻み込み続けている。家族内での性暴力の被害もいまだなくなることはない。こうした壮絶な性暴力を含めてあらゆる暴力をなくすためにはどうすればいいのか、女子大学として考え、対応策や解決策を社会に発信していかなければならないと切に感じる。こうした暴力は、日本にはびこるジェンダー不平等と無縁ではない。女性の人権を尊重し、ジェンダーにかかわらず社会への参画を可能にしていくこと、すなわち結果的にジェンダー平等を実現することは、間接的な暴力（不平等）をなくすことにつながる。日常的な直接的な暴力はいうに及ばず、間接的な暴力―女性への差別的な扱いーをなくすこと、このことがわたしたちにできる日常的な営為ではないだろうか。ジェンダーギャップランキングの上昇は、こうした積み重ねの延長上にあると思う。

（文責：田口久美子）

【編集後記】

戦後80年となる2025年は、日本で初めての女性総理大臣の輩出という大きなできごとがありました。日本で女性が内閣総理大臣になるのはいつになるのだろうかと、かなり先になることを想定していた方々が多かったのではないでしょうか。ただ、女性が総理大臣になったことそのものではなく、日本初の女性総理大臣が、多様な歴史を背負う人々が生きる社会において、いかなるメッセージを発信し、どのような政策を打ち出すのか、このことが重要であると考えます。生まれや育ち、考え方や文化も多様な人々を包摂し、すべての人々が豊かに生きられる共生社会の構築の実現こそ、ジェンダー不平等が色濃く残る日本で女性初の総理大臣が初めて生まれたことの意義となるでしょう。

和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所は、和洋女子大学の起源となる「和洋裁縫女学院」設立125周年を記念し、2024年4月に設立されました。設立2年目となる今年度も、年報第2号をお届けできることをうれしく感じます。今後も、格差や制約から解放され、一人一人が豊かに生きられる共生社会をめざして研究や活動を重ね、成果をお届けしてまいります。皆様方からのご指導・ご鞭撻をお待ちしております。

（文責：田口久美子）

和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所年報

［発行日］2026（令和8）年3月25日
［編集・発行］和洋女子大学ジェンダー・ダイバーシティ研究所
〒272-8533　千葉県市川市国府台2-3-1
e-mail: igwwu@wayo.ac.jp